

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 尾張 充典

フランツ・カフカ(1883—1924)はドイツ文学史上最も特異な存在といえるユダヤ系作家であるが、本論文は、カフカ文学の特質は物語短篇のジャンルにあるとの基本的認識に立って、カフカの諸作品の中から主たる分析対象として五篇の特徴的な物語短篇作品を選び、それらの極めて精緻な分析を通して——しかし、それら以外の諸作品、書簡、日記等にも言及するとともに、^{テトラグラム}四文字(JHWH)をめぐるカバラの言語理論(ショーレムの研究に依拠)に深く留意し、また、カフカに関する先行諸論考についても厳密に吟味を重ねつつ——カフカにおける物語創作の意志のありよう、ならびに、カフカ文学の構成原理たる「否定詩学」を、解明・叙述したものである。

カフカの作品世界は一義的な世界像に還元しえない屈折を孕んでいる。本論文において論者は、一義的解釈を妨げる要因を語りの構造の分析を通して取り出し、この要因が物語世界においていかなる機能を果たしているかを詳細に検討し、そこからカフカに特有な創作原理を導き、その詩学を明らかにしようとする。

本論文第一部では、カフカの言語観の持つ問題点が検討される。論者はカフカの言語実践を、言語の意味指示機能を克服し言語と書く主体との神秘的合一を志向するものと捉え、そこから破壊と救済の弁証法を導く。ついで、物語作品『流刑地にて』を分析し、合一の媒体とされる文字が意味指示的な記号へと硬直化する過程を示しつつ、この弁証法が書記言語の否定に至る必然性を解明する。続いて論者は、カフカの言語実践の特徴としてモノローグ的な状況を挙げ、この観点から物語断片『巣穴』の語りの構造を分析し、この物語断片を物語行為の物語と把握したうえで、主人公かつ語り手である「わたし」の内的統合が言表行為を通して目指される一方で、同時にこの言表行為が閉塞的状況下で空転してゆく機構を明らかにする。

第二部では、物語行為への意志が、伝記的要素を持つ物語『ある犬の研究』および『断食芸人』の分析を通して検討される。論者は、イロニーのありよう、語り手の視点の移動、話法の変化を克明に分析しつつ、伝記的物語が主人公の生を再構成し救済しようとする意図に貫かれていることを示すと同時に、語り手の地平を超えた層でこの語り手の言説が相対化され無効となる物語テキストの構造に注目する。そして論者は、テキストには直接的に現れない物語ることへの意志が語り手の言説の無化を通して否定的に表出することを指摘し、語り手の無化によって完遂される屈折した自己否定的物語構造に、一義的な世界像へ還元しえないカフカの創作原理の原型をみてとる。

第三部では、この創作原理の詩学的可能性が、『うた歌いヨゼフィーネ、あるいはね

『地獄の民』の解釈を通して検討される。論者は、内的統合の媒体としての主人公の芸術が否定的言辞によってしか記述されえないことを示し、その記述を試みる語り手の物語行為と主人公の表現行為との並行関係を指摘し、両者に向けられる否定的なものの救済への意志を解明する。ついで論者は、カフカの創作が「無として認識される生」に基づいていることを書簡および日記の記述によって根拠づけ、主人公の営み、語り手の言表行為、作家自身の経験が否定性において一貫していることを示す。これらの考察に基づいて論者は、「無として認識される生」を自己否定的に実演するカフカの屈折した物語構造の創作原理を「否定詩学」という概念で理解し、それがカフカの真摯な言語実践にほかならないと結論付ける。

以上のように、本論文は、主人公の言動、語り手の振舞い、作者の意志の関係とそれらのあいだのずれに着目し、これを精緻に分析することによって、言葉の意味指示機能のうちには直接現れてこないテキストの屈折した構造を明らかにし、そこに新たな詩学の可能性を見出す意欲的な研究成果であり、今後のカフカ文学の研究にきわめて有益な視点をもたらしたものと評価できる。他方、本論文はカフカの長篇作品を主たる分析対象としておらず、ここで明らかにされた創作原理と長篇小説との関連については議論の余地が残るほか、本論文で用いられた、短篇作品一篇に五〇頁余を費やす叙述形式は、そのままでは長篇作品の分析に用いることが困難である。とはいえこのことは、カフカの「否定詩学」における破壊と救済の弁証法の構造を見事に解明した画期的な功績を損なうものではない。

以上により、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するものと判断する。